

『紫式部集』第四〇・四一番歌の再検討

——〈恋歌〉としての贈答——

佐藤 香奈子

清水 絢音

はじめに

『紫式部集』は、注釈史の厚みという点で『源氏物語』には到底及ばないものの、今なお研究が活発に行われている作品のひとつではある。しかしながら、その和歌解釈は〈読者の考える紫式部像〉に囚われており、一つひとつの言葉と冷静に向き合っているとは決して言い切れない現状がある。本稿では、当該歌について各注釈書が提示する問題点を整理しつつ、新たな視点による解釈を試みたい。

一、研究の現状と問題点

今回取り上げる贈答歌は次のとおりである。^①

去年の夏より薄鈍着たる人に、女院かくれたまへるまたの春、いたう霞みたる夕暮れに、人のさしおかせたる雲の上のもの思ふ春は墨染に霞む空さへあはれなるかな（四〇）

返しに

なにかこのほどなき袖をぬらすらむ霞の衣なべて着る世に（四一）

この贈答歌は、一般に次のように解釈される。²⁾

去年の夏から薄墨色の喪服を着ていた人（私）に、女院がお隠れになった次の春のひどく霞んでいる夕暮れに、ある人が使者に持たせて来て置かせた歌

帝が喪に服して悲嘆にくれていらつしやる今年の春の、この夕暮れは、喪服の色に霞んでいる空までも悲しく感じられます。それにつけても、あなたはいかばかりかとお見舞い申し上げます。

返しに

取るにたりない私ごとき者が、どうして夫の死のみ悲しんで袖を濡らしているのでしょうか。国中の方が喪服をつけていらつしやる時ですのに。

これは、夫・宣孝の死と、前年冬に崩御した一条天皇の母后・東三条院詮子（女院）のために服喪する紫式部への見舞いの贈歌と、それに対する紫式部の答歌という構成である。天下諒闇のこの春、紫式部は夫と女院、二重の喪に服していることになる。

四〇・四一番歌の新たな解釈を試みるにあたり、まず注釈書をはじめとする先行研究の整理・検討を行った。³⁾そこから

浮かび上がる問題点を明らかにしていきたい。

従来の多くの注釈書・研究書は何者かが四〇番歌を紫式部に贈り、紫式部が返歌として四一番歌を詠む構図を見出し、おり、それが定着している観があった。しかし、現段階における最新の笹川博司氏による注釈書は四〇番歌が紫式部詠、四一番歌が何者かによる返歌という立場を取っている。まずはこの立場を見直し、紫式部が詠んだ歌ははたしてどちらなのかを明確にしたい。

〈贈歌と答歌、紫式部詠はどちらか〉

「四〇番歌が紫式部詠、四一番歌が何者かによる返歌」という構図は近年発表された工藤重矩氏の論が発端となっており、笹川氏の注釈書はそれを承けている。この詠み手逆転論は、夫を亡くして喪に服しているはずの紫式部がなぜ〈薄鈍〉の衣を着ているのかという点を問題にしている⁵⁾。ここで工藤氏の論をそのまま引用する。

宣孝の歿が長保三年（一〇〇一）四月であれば、紫式部が規定どおりに服喪したとすれば、翌年の長保四年の春には、薄鈍ではなく濃い鈍色を着ていたはずである。（中略）詞書にいう「薄鈍なる人」が紫式部だと言うためには、一年以内でも薄鈍に変えることがあると証明しなければならない。（中略）もし右の疑問が解消されなければ、服喪の仕方が規定と異なるからには、「薄鈍なる人」は紫式部ではないと言わなければならない。「薄鈍なる人」が紫式部ではないとなれば、「薄鈍なる人」は紫式部が和歌を贈った相手である。

（工藤重矩『源氏物語の婚姻と和歌解釈』）

この主張が適切であるかを判断するにあたり、四一番歌の「霞の衣」という語に目を向けたい。各注釈書に記載がある「霞の衣」の特徴を整理すると、次の二点が認められる。

(ア)「霞の衣」は、「墨染に霞む」を承けて「喪服」を表現している。

(イ)「霞の衣」によって「喪服」を表現する手法は『源氏物語』の中でも見られるが、紫式部独自の造語である。

さらに、「霞の衣」の用例を調べてみると、喪服か否かを定めずとも「霞の衣」を使用している例は勅撰集の中で八代集までを確認しても三首に留まる⁷⁾。この三首の中に「喪服」として使用されている例は見られない。また、平安時代の私家集・物語に範囲を広げても「霞の衣」が「喪服」の意味で使用されている例は『源氏物語』の中で使用される四首と四一番歌以外には見られない⁸⁾。よって、次のような条件も導き出せることになる。

(ウ)「霞の衣」を「喪服」として使用する表現は紫式部以外ではあまり一般的ではない。

「霞の衣」が紫式部の造語であり、紫式部独自の表現方法ならば、四一番歌の詠み手は紫式部であり、必然的に四〇番歌の詠み手が紫式部以外の何者かであることが確認できるだろう。「薄鈍着たる人」に関する問題は据え置く形になるが、この問題は〈何者かから紫式部へ向けた贈歌と、紫式部による返歌〉という構図を否定できる要素を持つものではないと言える。したがって、工藤氏・笹川氏の「四〇番歌の詠み手は紫式部以外の何者かであり、四一番歌が紫式部詠」という説は成り立たないことになる。やはり四〇番歌が何者か、四一番歌が紫式部という通説に落ち着かざるを得まい。

〈贈歌の詠み手の人物像〉

では、四〇番歌が何者かによる贈歌、四一番歌が紫式部による答歌という構図を再確認したところで、従来の注釈書・研究書に視点を移してみる。

四〇番歌の贈り主について、具体的に言及しているものをいくつか引用する。

歌をさしおかせた「人」（中略）の行為に敬語が用いられてないので、高貴の人ではないと考えられる。だが、贈歌（中略）を承けて（中略）謙遜した形で詠っている語感からは、宮廷関係の人を意識していることが感じられる。宮廷関係の人で式部と多少とも縁故のある人として想起されるのは、中務宮章明親王とか、中宮の母倫子などがある。もしそうなら、敬語がつけられたろう。あるいは、それらの高貴な人の命を受けた女房が、使いの者をして式部のもとへとどけさせたのではないかと思われる。

（南波浩『紫式部集全評釈』）

この歌はたぶん女性である先方から、霞が深く立ちこめた夕暮れに届けてきた。（中略）相手は貴顕の夫人か、またはその意を受けた女房だったのではないか。後年、宮仕えに召されるような関係が、彼女の属する家とか一族単位ではなしに、彼女自身との間にできていたことを予想させる贈答である。

（清水好子〈岩波新書〉『紫式部』）

歌「雲のうへの」は、亡き夫の喪に服している私に宛てた、女院の側からの消息の中の歌であり、女院近く仕える某からの見舞いの私信の歌であると解される。諒闇にあるあえて貴紳の側から、女房紫式部のもとに慰撫の心情をもつて見舞った挨拶の歌である。

（廣田收『紫式部集からの挑発』）

また、鈴木日出男氏は四〇番歌の詠み手を「おそらく女友達であろう」としている。これらの論に共通しているのは、この贈答歌が紫式部と同等もしくは身分の高い「女性」とのやりとりであると主張する点だ。しかし、ここで詞書・歌を丁寧確認すると、どこにも女性を想起させる文言は含まれていない。このやりとりを素直に読み解くのであれば、詠み手は女性であるという固定観念に囚われる必要はないのである。そもそも先行研究において、この四〇番歌の相手が女性である理由について、明確に論拠を示しているものは見当たらない。

さらに、紫式部の出仕時期については諸説あるものの、一般的には寛弘二年（一〇〇五）もしくは寛弘三年（一〇〇六）と考えられている。そうすると、歌が詠まれたとされる長保三年（一〇〇一）頃には、廣田氏の引用に付した傍線部で述べられているような「女房紫式部」への挨拶の歌が送られることはあり得ないと考えるのが自然だろう。

なお、この点に関して竹内美千代氏^①、山本利達氏^②、伊藤博氏^③、田中新一氏^④は詞書中の「人」を「ある人」や「宮人」と現代語訳することで性別を曖昧にして対処している。詞書や歌の言葉だけでは性別を断定できない以上、この処置は妥当であると言えそうだ。

このように、四〇・四一番歌のやりとりは、多くが「女性とのやりとりである」といった先入観のもとで解釈されてきた。それだけには留まらず、出仕前でありながらあたかも宮中の人間との出仕に関わるやりとりであるかのような解釈までなされるに至っているのである。贈答歌である以上、相手の素性についての認証が必要不可欠であるにも関わらず、この点についての十分な検討がこれまで行われてこなかったことを確認しておきたい。

二、第四〇・四一番歌は本当に喪中見舞いの歌なのか

先行研究の問題点を洗い出したところで、贈答の相手に留意しつつ新たな視点からこの贈答歌を捉えなおしてみたい。

この贈答歌の中で注目すべきなのは「もの思ふ」という語である。従来四〇番歌は、「もの思ふ」という言葉を、暗黙のうちには、亡き人を思い偲ぶ言葉として解釈してきた。しかし、その論拠となるものはなく、この語に着目した注釈もなされていない。ここで、「もの思ふ」という言葉の使用例を提示しその意味を確認してみることにする。

まず、紫式部が生きた時代前後の勅撰集の中から、「もの思ふ」という言葉を使用した例を調査した結果、この言葉を使用した歌は五九首存在する。¹⁵ そのうちのいくつかの例を次にあげる。¹⁶

是貞親王家歌合の歌

よみ人しらす

いつとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ことのかぎりなりける（一八九）

〔古今和歌集〕卷第四秋歌上

桂のみこに住みはじめける間に、かのみこあひ思はぬ気色なりければ

貞数の親王

人知れず物思頃のわが袖は秋の草葉に劣らざりけり（九〇一）

〔後撰和歌集〕卷第十三恋五

題知らず

よみ人知らず

ひたぶるに死なば何かはさもあらばあれ生きてかひなき物思身は（九三四）

〔拾遺和歌集〕卷第十五恋五

男に忘られて侍ける頃、貴布禰にまいりて御手洗川に螢の飛び侍けるを見てよめる

和泉式部

もの思へば沢のほたるもわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る（一一六二）

〔後拾遺和歌集〕卷第二十雑六）

「もの思ふ」という語は、自然の風物を愛でながら物思いにふけるものや、恋煩いの心情を吐露する和歌においてよく用いられる。調査対象となった和歌を部立てごとに分類し、それぞれを合算してみたい。すると、春から冬にかけての部立てに属する和歌が二四首、恋の部立てに属する和歌も同じく二四首確認できる。これは、「もの思ふ」使用和歌総数の約四割をそれぞれ占めている。よって、「もの思ふ」という語は必ずしも死別の悲しみを含むものではないと言えるだろう。また、「哀傷」の部に「もの思ふ」の使用例がないことも、故人を偲ぶ意図で使用されていないなかつたことを裏付ける。

ここで「もの思ふ」という語の使用例に共通する意図を探ってみると、基本的な概念として、「伝えたいけれども伝わらない／伝わらないけれども伝えたい」という、心のうちに相反する感情を抱えたときに使用されることが分かる。

同様の例として『源氏物語』からいくつか引用したい。

この御生霊、故父大臣の御霊などいふものありと聞きたまふにつけて、思しつづくれば、身ひとつのうき嘆きよりほかに人をあしかれなど思ふ心もなければ、もの思ひにあくがるなる魂は、さもやあらむと思し知らるることもあり。

（葵②三五～三六頁）

六条御息所は、自分や自分の父の霊が物の怪となって葵の上に取り憑いているのだと噂されているのを知り、考えてみれば自分では恨み心などないつもりであったが、物思い故に身を抜け出してさまよってしまうという魂が、もしかしたらあの方（葵の上）に取り憑いているのかもしれない、とお思になることもあるというのである。

この場面でも、「もの思ふ」という言葉は強烈な感情の発露として使用されており、時にその思いは生霊としてさまよふほどの強さでなければならぬ。さらに、次のような「もの思ふ」の用例もある。

二条院の御前の桜を御覧じても、花の宴のをりなど思し出づ。「今年ばかりは」と独りごちたまひて、人の見とがめつべければ、御念誦堂にこもりゐたまひて日一日泣き暮らしたまふ。夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが鈍色なるを、何ごとも御目とどまらぬころなれど、いとものあはれに思さる。

入日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる

(薄雲②四四八頁)

光源氏は藤壺が亡くなった後、二条院の桜を御覧になつても、共に花の宴を行ったことなどを思い出される。人目を避け、念誦堂で一日中泣き暮らしていると、夕日が美しく山際の梢を照らし、鈍色の雲が薄く流れてゆくのを、とてもあわれなことだと思ひになる。

入日が射している峰にたなびく薄雲は、物思いにふける私の袖(喪服)の色と違えるような色をしている。

ここで注目したいのは、「入日さす」の和歌に「もの思ふ」という語が使用されているという点だ。この場面は、藤壺を亡くした光源氏が独り夕暮れ時にその心情を吐露するものである。この歌に用いられる「もの思ふ」という語句も、単に大切な人を亡くした悲しみの喪に服している状況を表すものではなく、今は亡き藤壺に伝わらないと分かっているが、それでもこの藤壺を想う気持ちを伝えたいと願う、光源氏の痛切な心情を表したものであると捉えられるだろう。

現行の解釈では、四〇番歌における「もの思ふ」という語を「亡き人を思い偲ぶ」という意味にしか捉えていない。しかし、先に掲げた勅撰集には服喪を意識した語としての使用例はなく、同一作者の作品内においても、その場面の特殊性・重要度から見て、故人を偲ぶ語としてのみの使用などという単純さは排除されるべきであろう。

それでは、当該歌の「もの思ふ」はどのように解釈されるべきなのか。「もの思ふ」という語は前述したとおり風物や恋に思い悩む際に使用される語であった。とするならば、『紫式部集』四〇番歌における「もの思ふ」の語もまた、同様の意味を与えられていると見るのが自然ではないか。

続いて、答歌からの視点をもってこの贈答を見てみたい。

前述した、四一番歌において詠み込まれる「霞の衣」という語の特殊性に着目し、この語を構成する「霞」という語に關しても今一度その役割を確認したい。

日もと長きにつれづれなれば、夕暮のいたう霞みたるにまぎれて、かの小柴垣のもとに立ち出でたまふ。人々は帰したまひて、惟光朝臣とのぞきたまへば、ただこの西面にしも、持仏すゑたてまつりて行ふ尼なり。

(若紫①二〇五頁)

夕暮れ時の霞にまぎれて、例の小柴垣を惟光と二人で覗いてみると、仏を安置申し上げてお勤めする尼が一人いた。

これは、瘧病に悩んだ光源氏が加持を受けるために北山を訪れ、そこで幼い紫の上を見初める場面である。ここで霞は、小柴垣から垣間見を試みる光源氏を隠す機能を果たす。夕暮れの霞は垣間見には絶好の環境であり、光源氏が屋敷の者たちから見えない状況を作り出すおぼろげな表現となっている。しかし、完全に見えないわけではない。このしばらく後にかけつけた僧都は、「こなたはあらはにやはべらむ。」と屋敷の尼君に忠告する。

御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐいたまへる人、ものに紛るべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見

る心地す。

(野分③二六四頁)

御屏風も風がとても吹いているので畳んで寄せてある。そのために露になつてしまつた廂の間の御座所にいらつしやる人(紫の上)は、ほかの人と見間違へることもない。気高く美しく、照り映えるようで、春の曙に、霞の間から風情ある樺桜が咲き乱れているのを見るようであつた。

紫の上を垣間見た夕霧は、その美しさを樺桜に例える。夕霧の視線で展開するこの場面において、屏風を霞に例えることで紫の上の美しさを隠し、二人の距離を隔てる役割を担っている。しかし同時に、この屏風であり霞でもある「隔て」は、風で吹き飛ばされるような脆さを抱え、完全な目隠しにはならない。霞は人や物を隠し、隔てる一方、完全な目隠しとはなり得ずに隙間から見え隠れしてしまふ、非常に脆い障壁であると判断できる。見えそうで見えないが故に、その視線は障壁の向こう側に集中して注がれることとなる。

これらの効果を四一番歌にあてはめてみたい。「霞の衣」すなわち「喪服」を着る行為は死者を悼むものだ。言い換えれば、喪服を着ることは大切な人がこの世に存在しないことを体感する行為と言えるだろう。「霞」は、紫式部から四〇番歌の送り主との距離を心理的にも物理的にも隔て、受け入れ難い現実を隠し、拒もうとする効果もたらされていることが見えてくる。さらに、前述したとおりの霞の脆さに注意するなら、拒みはするもののわずかな可能性を残すという恋歌の贈答のあり様が重ねて浮かび上がってくる。実際、宣孝の死去が歌の前年夏であること、歌の贈答が春であることから、春が終わり、夏がくると喪は明けるのである。「霞(＝喪服)」が春の終わりに消えることも関連していると見て問題ないだろう。

以上の事柄から、「霞の衣」は喪服を意味するだけでなく、四一番歌においては「異性からの求愛を拒む素材」という機

能が与えられていると読み取ることができるのではないか。

加えて、四一番歌初句の「なにか」に着目したい。係助詞「か」は、直前の副詞「なに」とあわせて「どうして……だろうか、いや……」という反語の意として使用される。この語について先行研究は、単に「ぬらすらむ」に係る語であるという認識を持つのに留めており、「¹⁷どうして私のような取るに足らない者の袖が悲しみでぬれましようか、いえ、私の袖などぬれてはおりません」と訳している。謙遜の意を含ませることにより、夫・宣孝の死の悲しみをより強調するといふものが、今日までにおける解釈である。しかし、この反語の意を恋歌として捉えるならば、贈歌の内容や贈歌の詠み手に対する反発の意を持たせていることは明らかだろう。贈答の形式をとる以上、双方に何らかの意思の提示が根本にあると言える。それは、答歌の詠み手が常に「受け手」であり、贈歌に対して何らかの意思表示をしなければならない立場にあることを意味してもいる。

ここで注意を払っておきたいのは、四〇番歌の詞書に見られる「女院かくれたまへるまたの春」、すなわち長保四年における紫式部の身辺状況について、同時期に詠まれたとされる四九番歌からの三首にもとづく次のような見解である。

第三首に「霞にとづる宿」とあるのは、単なる春霞のたちこめてゐる宿ではなく、喪中の家と言ふから、長保三年の暮から四年の正月にかけてのことで、彼女が未亡人となるや否や、すぐ思ひを懸けて来た男があることをあらはしてゐる。

（岡一男『源氏物語の基礎的研究 補訂版』）

この「すぐ思ひを懸けて来た男」は、この頃五年の任期を終えて肥前から帰京した肥前守橘為義ではないかという主張も同書で述べられている。また、「帯木」巻に関しても岡氏は「この巻と次の巻とは空蟬のことが描かれ、繼子紀伊守の

横戀慕も出て来るが、それは紫式部が宣孝の長男の隆光などに経験したことではなかったか」と述べている。

夫を亡くし未亡人となった紫式部であるものの、父親が存命で家督を継ぐ者もいる以上、噂の才媛を伴侶に望む男性がいなかったと断言することは難しい。ここで重要なのは、右の二人が本当に求婚していたかどうかではない。宣孝の死後、紫式部に求婚していた人物が少なからず存在していたという可能性を否定する材料がなく、むしろ状況から考えれば求婚者が列をなした可能性すらある、という点だろう。推測の域は出ないが、紫式部に求婚を迫る男の数はゼロではないと考えられるのである。

以上の岡氏の見解に加え、夫・宣孝の死から一年が経とうとしていることから、この四〇・四一番歌の贈答を、男性から紫式部への喪中見舞いにかこつけた求婚歌であるとして捉えた場合を考えてみたいのである。

無論、求婚歌に対しては、その意向に気づかぬ振りを装いながら婉曲に拒絶するという、「女歌」の伝統に即した紫式部の返歌が定位されることになる。

新解釈としての現代語訳を次に掲げる。表面的な意味としては、通説にそのまま従うことになるが、括弧によって示した裏の意味が当事者同士の真意であり、それが本稿のオリジナル部分ということになる。

去年の夏から薄墨色の喪服を着ていた人（私）に、女院がお隠れになった次の春のひどく霞んでいる夕暮れに、ある人が使者に持たせて来て置かせた歌。

宮中も喪に服して悲嘆にくれている今年の春の、この夕暮れは、喪服の色に霞んでいる空までも悲しく感じられます。それにつけても、あなたはいかばかりかとお見舞い申し上げます。

（あなたが二重の喪に服していると思うにつけ、私の心もまるで魂が身から離れるように二重に苦しくなるのです。女院の死を悲しむ心と、他よりも深い悲しみに沈んでいるであろうあなたにこの恋心を伝えたいと願ってしまいう心で）

返しに

どうして私のような取るに足らない者が、袖をぬらして悲しみに暮れてしましようか、いえ、私の袖などぬれてはおりません。国中が喪服を着ているこのような世の中ですのに。

(私の袖がぬれていようといまいと、国中が悲しみに暮れるこのようなときに、あなたのお気持ちに寄り添うつもりはございません)

おわりに

四〇・四一 番歌は、その本文に即した解釈がなされてきたとは言い難く、多くの先人観のもとで解釈が固定的になされてきた。そこで、本文にある言葉そのものを頼りに解釈を紡ぐことを改めて意識した結果、このような解釈を導き出すに至った。——夫・宣孝以外には男女関係を持たない清廉な寡婦であり、中宮彰子に仕えた「女房」としての源氏物語作者・紫式部——を念頭に置いた解釈ではなく、『紫式部集』そのものを見つめれば、提示したような新たな解釈も生じ得るのではないだろうか。すでに作り上げられている紫式部像に固執することなく、素直な視点で『紫式部集』という作品を見つめなおしてみたい。

注

(1) 引用本文は、古本系の最善本とされる陽明文庫本を底本とする〈新潮日本古典集成〉『紫式部集』(山本利達校注・一九八〇年二月)による。歌番号も同書による。

(2) 歌の現代語訳は注(1)に同じ。詞書の現代語訳は本稿執筆者による。

- (3) 使用した注釈書ならびに研究書は次にあげるとおりである。
- ・竹内美千代『紫式部集評釈 改訂版』(一九六九年六月、改訂版一九七六年三月 桜楓社)。
 - ・南波浩〈岩波文庫〉『紫式部集』(一九七三年一〇月 岩波書店)。
 - ・山本利達〈新潮日本古典集成〉『紫式部日記 紫式部集』(一九八〇年二月 新潮社)。
 - ・木船重昭『紫式部集の解釈と論考』(一九八一年 笠間書院)。
 - ・木村正中・鈴木日出男・後藤祥子・小町谷照彦・秋山虔〈紫式部集全歌評釈〉(『國文學―解釈と教材の研究―昭和五七年一〇月号 第二七卷一四号) (一九八二年一〇月 學燈社)。
 - ・南波浩『紫式部集全評釈』(一九八三年六月 笠間書院)。
 - ・伊藤博〈新日本古典文学大系〉『紫式部日記(紫式部集)』(一九八九年一月 岩波書店)。
 - ・中周子〈和歌文学大系〉『紫式部集』(明治書院 二〇〇〇年三月)。
 - ・田中新一〈新注和歌文学叢書〉『紫式部集新注』(青簡社 二〇〇八年四月)。
 - ・上原作和・廣田収『紫式部と和歌の世界 一冊で読む紫式部家集 新訂版』(武蔵野書院 二〇一二年四月)。
 - ・笹川博司〈私家集全積叢書〉『紫式部集全積』(風間書房 二〇一四年六月)。
 - ・岡一男『源氏物語の基礎的研究 補訂版』(東京堂出版 一九六六年八月)。
 - ・清水好子〈岩波新書〉『紫式部』(岩波書店 一九七三年四月)。
 - ・工藤重矩『源氏物語の婚姻と和歌解釈』(風間書房 二〇〇九年一〇月)。
 - ・廣田収『紫式部集』歌の場と表現』(笠間書院 二〇一二年一〇月)。
 - ・廣田収『紫式部集からの挑発』(笠間書院 二〇一四年五月)。
 - (4) 笹川博司〈私家集全積叢書〉『紫式部集全積』(風間書房 二〇一四年六月)。
 - (5) 『令義解』巻冊「喪葬令」服紀条に、「凡服紀者爲君父母及夫本主一年」(新訂増補國史大系)とある。妻が夫の喪に服す場合は一年間鈍色(濃いねずみ色)を着ていなければならないはずであり、式部がこの時期に薄鈍色を着ているのはおかしいと工藤重矩氏は問題にしている。

- (6) 調査には、新編国歌大観編集委員会監修『新編国歌大観』（角川書店 二〇〇三年六月）を使用した。
- (7) 次の三首である。
- ・「はるのきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ」（『古今和歌集』巻第一春歌上・二三）
 - ・「ゆきかかる雲ちは春もさえければかすみの衣きてかへる雁」（『金葉和歌集』巻第一春部・一四（初撰二度本系にのみ））
 - ・「わぎも子が袖ふるやまも春きてぞ霞のころもたちわたりける」（『千載和歌集』巻第一春歌上・九）
- (8) 『源氏物語』の中で使用される和歌は次の四首である。
- ・「木の下のしづくにぬれてさかさまにかすみの衣着たる春かな」（柏木④三三五頁）
 - ・「うらめしやかすみの衣たれ着よと春よりさきに花の散りけむ」（柏木④三三六頁）
 - ・「亡き人も思はざりけむうちすてて夕のかすみ君着たれとは」（柏木④三三六頁）
 - ・「はかなしやかすみの衣たちしまに花のひもとくをりも来にけり」（早蕨⑤三三三頁）
- (9) 木村正中・鈴木日出男・後藤祥子・小町谷照彦・秋山虔（『紫式部集全歌評釈』（『國文學―解釈と教材の研究―昭和五七年一〇月号 第二七卷一四号』一九八二年一〇月 學燈社）。
- (10) 伊藤博（『新日本古典文学大系』『紫式部日記（紫式部集）』（一九八九年一月 岩波書店）による。
- (11) 竹内美千代（『紫式部集評釈 改訂版』（一九六九年六月、改訂版一九七六年三月 桜楓社）。「或る人」としている。
- (12) 山本利達（『新潮日本古典集成』『紫式部日記 紫式部集』（一九八〇年二月 新潮社）。「ある人」としている。
- (13) 注(10)に同じ。「ある人」としている。
- (14) 田中新一（『新注和歌文学叢書』『紫式部集新注』（青簡社 二〇〇八年四月）。「ある宮人」としている。
- (15) 注(6)に同じ。
- (16) これらの引用は次の注釈書からのものである。
- ・小島敬之、新井栄蔵校注（『新日本古典文学大系』『古今和歌集』（一九八九年二月 岩波書店）
 - ・片桐洋一校注（『新日本古典文学大系』『後撰和歌集』（一九九〇年四月 岩波書店）
 - ・小町谷照彦校注（『新日本古典文学大系』『拾遺和歌集』（一九九〇年一月 岩波書店）

・久保田淳、平田喜信校注〈新日本古典文学大系〉『後拾遺和歌集』（一九九四年四月 岩波書店）

(17) 宣孝の死亡時期については諸説あるものの、尊卑分脈によれば、長保三年四月二十五日とある。（新訂増補國史大系）

(18) 『紫式部集』第四九番歌からの三首は次のとおりである。引用は〈新潮日本古典集成〉『紫式部集』（山本利達校注・一九八〇年二月）による。歌番号も同書による。

・門たたきわづらひて帰りける人の、つとめて／世とともにあらし風吹く西の海も磯べに波も寄せずとや見し（四九）

・と恨みたりける返り事／かへりては思ひしりぬや岩かどに浮きて寄りける岸のあだ波（五〇）

・年かへりて、「門はあきぬや」といひたるに／たが里の春のたよりに鶯の霞に閉づる宿を訪ふらむ（五一）

(19) 注(17)に同じ。

なお、本稿における『源氏物語』の引用は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集①～⑥』（小学館、一九九四年三月～一九九八年四月）に拠り、各引用括弧内に巻名・全集巻数・頁数を付した。

（国文学科三年生）

本誌掲載の次の論文について、本文に一部誤りがあることが分かりましたので、訂正させていただきます。お手数ですが、左次の通りご修正ただければ幸いです。

論文名 『紫式部集』第四〇・四一番歌の再検討——〈恋歌〉としての贈答——」

著者名 佐藤香奈子・清水絢音

訂正（六八頁一三行目）

〈誤〉…したがって、工藤氏・笹川氏の「四〇番歌の詠み手は紫式部以外の何者かであり、四一番歌が紫式部詠」という説は成り立たないことになる。

〈正〉…したがって、工藤氏・笹川氏の「四〇番歌の詠み手は紫式部であり、四一番歌が紫式部以外の何者かである」という説は成り立たないことになる。

平成二八年四月

愛知淑徳大学国文学会